

泣くこと

第12期 岸部 海人

自分にしてはよく泣いたなー、なんてことを最近ではよく思う。自慢ではないが、私は中高6年間において、1度たりとも泣いたことがなかった。特に部活の引退公演では、同期で自分だけ泣かず、空気が読めなくて申し訳ありません的な感じになっていたほど、泣くこととは縁がない人間であった。そんな自分が、この2年にも満たないゼミ生活において3回も涙を流すことになるとは夢にも思わなかった。案外泣くのも悪くないものだ。なんとなく脱皮して一回り大きくなったような気分になれる。

調べてみると、涙とは感情が高まった時に流れるものであるらしい。何事にも全力で取り組む小野ゼミは、嬉しさや悲しさ、その他もろもろの感情もまた格別であるため、もしかしたら泣くこととは割かし縁のあるゼミなのかもしれない。例えば、三田論を執筆するにあたっては、チーム一同非常に辛い日々を過ごしてきたし、そんな日々を乗り越えて書き上げた論文が市場創造研究に掲載されているのを見た時には、みんなで心から喜んだものだ。また、自分は卒論が終わらず多大な迷惑をかけてしまう中で、思わず号泣してしまうほどの惨めさや情けなさを味わったが、その分合格を頂けた際には途方もない達成感を味わえることであろう。



祝！市場創造研究掲載（著者は左端）

そんな小野ゼミを私が志望したのは、特に秀でた才能があるわけでもなく、かといって、特になにか努力しているわけでもない自分に対する漠然とした危機感を紛れさせなかったからであった。とりあえずエグゼミ入ってエグっておくか、そんな軽い気持ちで入ったので、まさか20歳を超えた成人が時に涙を流すほどの濃密な時間が待ち受けているとは正直思っていなかった。辛かったり悲しかったり情けなかったりと毎回異なる理由で涙を流してきて、その都度泣いている自分がかっこ悪いなんてことも考えたが、そんなことよりも、これまでの一步引いたスタンスに身をおいて、泣けるほどなにかを頑張っただけでこなかったこれまでの自分の方がよっぽどかっこ悪い、そう考えられるようになった。自分にとっては大きな変化である。

今年の4月から私は晴れて社会人になる。世の中のことをもっと知りたいような気がするという軽い気持ちで受けて内定を頂いた証券会社では、おそらく自分が小野ゼミでそうであったように、多く想定外のことが待ち受けていることであろう。しかし、やることは小野ゼミと変わらない。悔し泣きでも嬉し泣きでもいい。中途半端な気持ちではなく、泣けるほど一生懸命になってやっていくことが当面の目標である。そして、気づいたら立派な社会人になっていたら幸いだし、それこそが、これまでお世話になった小野先生や大学院生などにできる最大の恩返しであり、散々お世話になった自分に課せられた義務なのであろう。